

# 紀 要

第 16 号

2003. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

## 柳遺跡の水田遺構の一考察

坂口 健太

### 1. はじめに

柳遺跡は草津市の中央部を流れる草津川の左岸、草津市青地町に所在する。これまでの発掘調査から弥生時代から鎌倉時代の集落跡として周知されている。草津川放水路建設工事に伴って行われた平成12年度の発掘調査では、13世紀中頃～15世紀後半以降に営まれた水田遺構とそれに伴うと考えられる掘立柱建物等が検出されている。また、平成13年度の調査区ではこれと同時期と考えられる水田遺構や弥生時代後期の自然流路等が検出されている。これらの水田は3回～5回の作り直しが確認できる。田面の上には洪水砂と考えられる砂が堆積し、数回にわたる洪水被害を受けた状況が確認できる。

以下、平成13年度の発掘調査の成果を中心にこの水田遺構について若干意見を述べてみたいと思う。

### 2. 地理的環境と歴史的環境

調査地は草津川と伯母川に挟まれた沖積平野に位置する。草津川は草津市山寺町で美濃郷川と合流し、栗東市岡で金勝川と合流し、草津市を横断し琵琶湖へと流れている。この草津川は古くから天井川として知られ、普段、水量はほとんどないが、大雨のときはよく洪水を引き起こしていた。近年では昭和29年9月の台風13号による被害が挙げられる。また古くは砂川<sup>①</sup>とも呼ばれることからその土砂運搬能力は容易に想像される。そのため当地は地下水位が高く湿地的な状態であったと考えられる。また、伯母川は志津川、宮川とも称され、旧草津町大字草津の南東で柳川に分水し、御倉を経て琵琶湖へと注ぐ<sup>②</sup>。伯母川は草津川ほどの川幅は持たないが、常時水が流れている。

このように水源は豊富であり、洪水により肥沃な土が運ばれることや湿地に近い状態であったことを考えると、水田開発には適した土地であったと想像される。

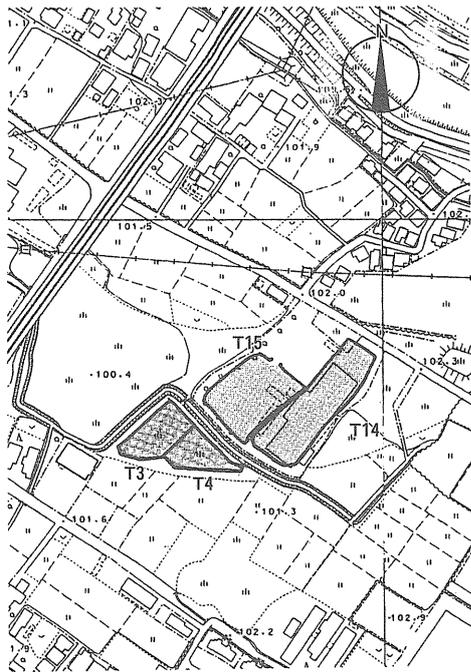
次に歴史的な側面からこの地を見てみると、まず、

「青地町」という地名と「青地氏」の関係が見えてくる。青地氏は佐々木氏の支流、馬淵氏を祖とする。青地氏がこの地に入ってきたのは鎌倉時代の中頃と考えられ<sup>③</sup>、調査地の南東約1kmには青地城があった。この地は「青地庄」と呼ばれ鎌倉時代後期には青地氏は最盛期をむかえた。今回検出された水田遺構はこの前後の時期にあたる。その後この地は部田村と呼ばれ、さらに周辺の村と合併し現在の草津市となる。

この周辺では弥生時代後期から稲作が行われていた可能性が指摘され<sup>④</sup>、農業に適した環境がそろう、また東海道や中山道が近くを通り、交通の要衝であったことから青地氏は重要拠点と位置付けていたと考えられる。さらに、青地という地名からは青々とした水田が広がり、豊かな土地であったことが想像される。その後も部田村という地名があったことからこの地はずっと水田の風景が残っていたと思われる。つまり、栗太郡条里地割がこの地に施行されてからその景観は大きく変わることはなかったということである。そして今日でもその風景の一部をみることができる。

### 3. 平成12年度（T3・T4）の調査概要

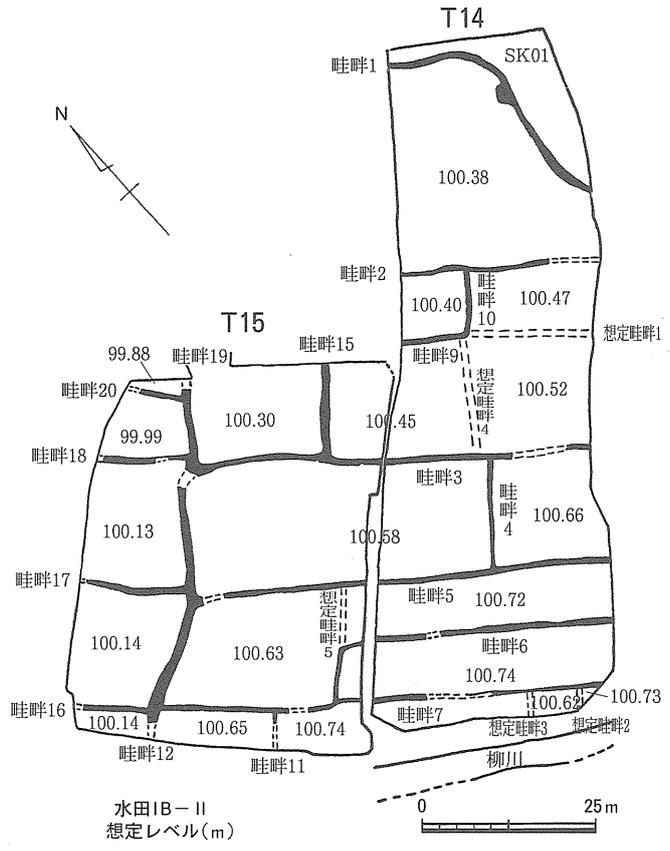
平成12年度は、調査対象地にT3・T4の調査区を設定し調査を行った。T3・T4は柳川の南に位置し、鎌倉から室町時代の水田遺構と掘立柱建物がセットで検出された。建物跡は4棟確認されるが1棟は母屋で残りの3棟はそれに付随するものと考えられ、水田耕作者の住居の可能性が考えられている。水田は3回の変遷を確認している。古い段階から水田1B、水田1A、水田2である。水田の上面には洪水による砂が堆積し、動物や人間の足跡および鍬、鋤などによる耕作痕を検出している。また洪水砂は足跡などの中のみ残り、水田帯には広がっていない段階もあり、洪水後の復旧作業で取り除かれていると思われる。主畦畔の方向はN38°Eで栗太郡



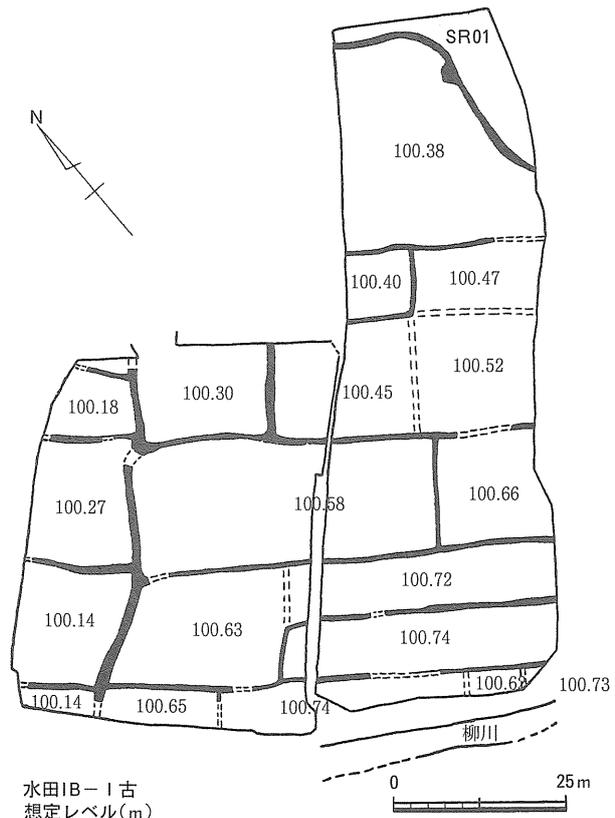
柳遺跡トレンチ配置図

(S=1:5000)

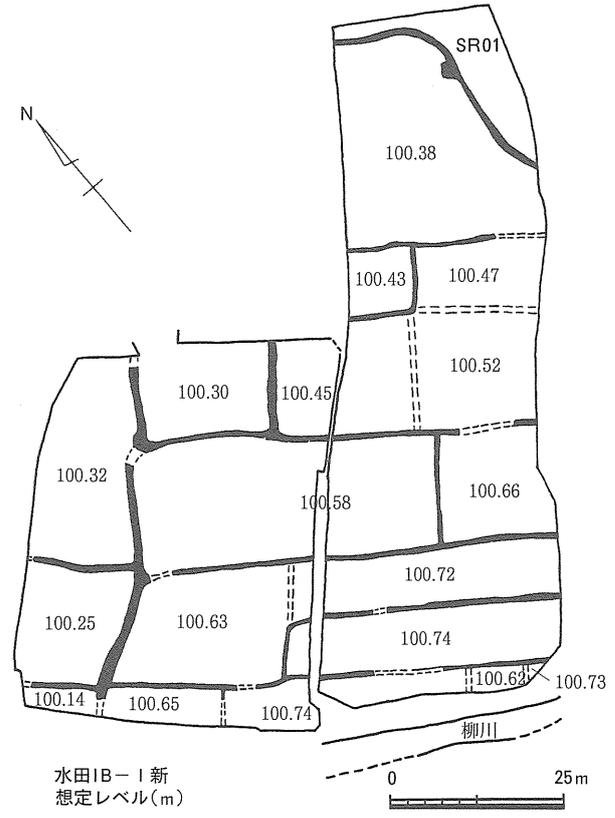
- 平成12年度調査区 (T3, T4)
- 平成13年度調査区 (T14, T15)



水田IB-II  
想定レベル(m)



水田IB-I 古  
想定レベル(m)



水田IB-I 新  
想定レベル(m)

主条里地割にほぼのっとなっている。また現在の畦畔とも重複することから、今日に至るまで大きくその景観を変えていないことがわかる。

#### 4. 平成13年度（T14・T15）の調査概要

平成13年度は、調査対象地にT14・T15の調査区を設定し調査を行った。T14・T15は柳川の北側に位置する。T3・T4で検出された水田と同時期と考えられる水田跡を検出した。この水田は5回の変遷を確認した。古い段階から水田1B-II、水田1B-I古、水田1B-I新、水田1A、水田1Cである。水田1B-II～水田1B-I新の段階はT3・T4の水田1Bに対応し、水田1Cは水田2に対応するものと考えられる。また、水田1Aの上面の洪水砂はそれぞれのトレンチ（T4・T15）で同じ様相を呈し、同一のものと考えられる。

各水田の段階で畦畔の数は異なり、段階が下にしたがい畦畔の数は減少し、田面1筆1筆の面積は拡張される傾向にある。水田面のレベルは各時期とも概ね南から北東方向に緩傾斜する傾向が見られる。ただし、水田1B-II～水田1Aにかけては畦畔12と畦畔19より西側で大きく段差が作られ、水田面が低くなる。水田1Bの各段階と水田1Aの上面では足跡や耕作痕などを検出する。

#### 5. 水田の変遷

今回検出された水田は先に述べたように平成12年度の調査で3段階、平成13年度の調査で5段階の作り直しをそれぞれ確認している。ここではそれぞれの段階についてもう少し詳しく見ていきたいと思う。

##### 【平成12年度調査区（T3・T4）】

##### <水田1B>

耕土は暗灰～黒灰色土もしくは粘質土である。畦畔は5条、田面は3筆検出される。

T14・15における水田1B-II～1B-I新の段階に対応する水田である。田面の上で洪水砂の堆積を一部確認し、その下で人や動物の足跡を検出している。<水田1A>

耕土は灰色粘質土で、水田1Bの耕土よりやや粘性が強い。畦畔は3条で田面は1筆検出される。水田1Bが洪水被害を受けた後に作られた水田で、一

部の畦畔をなくし、田面は拡張されている。田面の上面は全域にわたって洪水砂に覆われる。足跡のほか鍬や鋤による耕作跡が多数検出されている。

##### <水田2>

水田1Aの東隣に開かれた水田である。水田1A廃絶後作られ、T14・15における水田1Cの時期に対応する田面である可能性が考えられる。耕土の残りは悪く、詳細は不明である。

##### 【平成13年度調査区（T14・T15）】

##### <水田1B-II>

水田1B-IIは今回検出された水田の中で最も古い段階に開かれた水田である。耕土は暗灰～黒灰色土あるいは粘質土でやや砂質が強いところもある。耕土中より出土した遺物から13世紀中頃に開かれたと想定される。

この水田は田面が最も細分化された段階であり、検出された畦畔、想定される畦畔あわせて22条で田面は20筆を数える。田面は南西から北東にむかって段差がつけられ、低くなっていく。これは草津市を流れる河川の方角と一致し、地形にあわせて水田が開かれたと考えられる。ただし、畦畔12と畦畔19より西側では大きく段差ができ、田面のレベルはまわりよりはるかに低くなっている。ここは水田が開かれる以前は自然流路があり、もともと少し谷地形であったことによるものと考えられる。

この段階の田面の高さは一番高い田面で標高100.74mを測り、一番低い田面では99.88mを測る。いずれも想定ラインであるが、その高低差は86cmにもなる。各段階における田面の想定ラインの詳しい検討は補論で行う。

##### <水田1B-I古>

水田1B-I古は水田1B-IIの一部が洪水被害にあったのち復旧された水田である。洪水により堆積した川砂は畦畔12と19の西側でT15北壁から畦畔17までの間で検出され、その洪水砂を取り除き、田面が復旧されている。洪水の氾濫源は砂の及ぶ範囲、調査時の状況などからT15の北および北西方向に想定される。洪水砂が及ばなかった田面は水田1B-IIの耕土をそのまま利用していると考えられる。畦畔、田面の数ともに水田1B-IIの段階と変化は認められない。ただし、畦畔17、18、19、20は積み直

しが確認できる。耕土は暗青灰色粘質土で水田1B-IIの耕土よりも粘質が強くなる。

復旧された田面のレベルは水田1B-IIの段階より14~19cmほど高くなり、100.14~100.27mを測るが、南西から北東に低くなっていく傾向はこのときまでは変化しない。水田の存続期間は13世紀末から14世紀中頃と考えられる。

#### <水田1B-I新>

水田1B-I新は水田1B-I古が再び洪水による被害を受けたのちに作られた水田である。耕土が復旧される範囲は畦畔12と19の西側で、T15北壁から畦畔16までの間と畦畔2、9、10で区画される田面である。この段階で畦畔18と20が無くなり、前段階まで3筆あったところを畦畔17と12、19で区画される1筆の田面としている。この田面のレベルは100.32mを測る。この段階で復旧された田面は北から南に向かって傾斜がつけられており、前段階までの田面の状況と正反対の様相を呈している。このことは調査区北西側に想定される流路からの氾濫を警戒し、意識していたことを示していると考えられる。この水田の存続期間は14世紀中頃から14世紀末で、検出された畦畔は20条、田面は18筆を数える。

#### <水田1A>

水田1Aの段階ではそれまでの部分的な復旧とは異なり、畦畔5、12より以北の水田に新たに耕作土が作られていることが特徴として挙げられる。この段階では畦畔9、16、17、19が無くなり、水田1筆の大きさをさらに広げ、畦畔3、12より以北の田面のレベルをおよそ100.50mで統一している。これは平成12年度調査区(T4)の水田1Aのレベルと同じである。またT4の水田1Aと同様に田面の上には大量の川砂の堆積が認められる。

耕土は水田1B-I新と比べて粘性が強く、暗灰色粘質土である。時期は14世紀末から15世紀末と考えられる。

#### <水田1C>

水田1Aが大量の川砂に覆われたためその上面に復旧された水田である。平面調査を行っていないためトレンチ断面のみによる確認である。畦畔は12条、田面は10筆を想定している。耕土は青灰色砂混じり粘土で構成され、トレンチ全域に広がる。水田上面

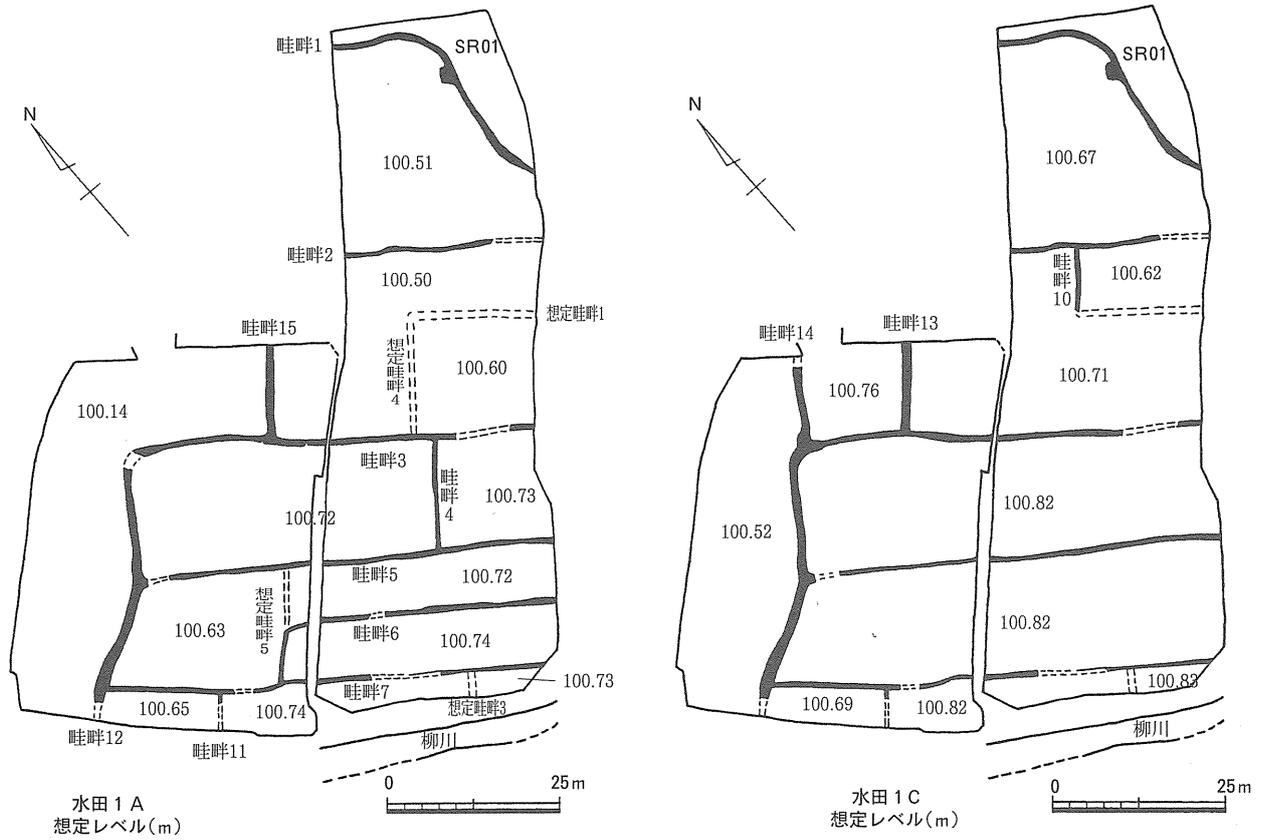
のレベルは100.62~100.82mを測る。今回検出された水田の中では田面1筆の面積が最も拡張される段階で、それぞれの田面の高低差も小さくなる。時期は15世紀後半以降でT3の水田2との関連が考えられるが、間には「柳川」を挟んでいるのでその検証は困難と考える。

以上、各段階の水田について概観してきたが、全体として約300年以上にわたって水田あるいは畑地として耕作されていることがわかった。しかしその間ずっと耕作され続けていたかどうかは定かでない。ある一定期間休耕することも考えられるがそこまでは今回の調査ではわかっていない。しかし300年以上の間水田、畑地以外に利用されていた痕跡は確認できなかった。

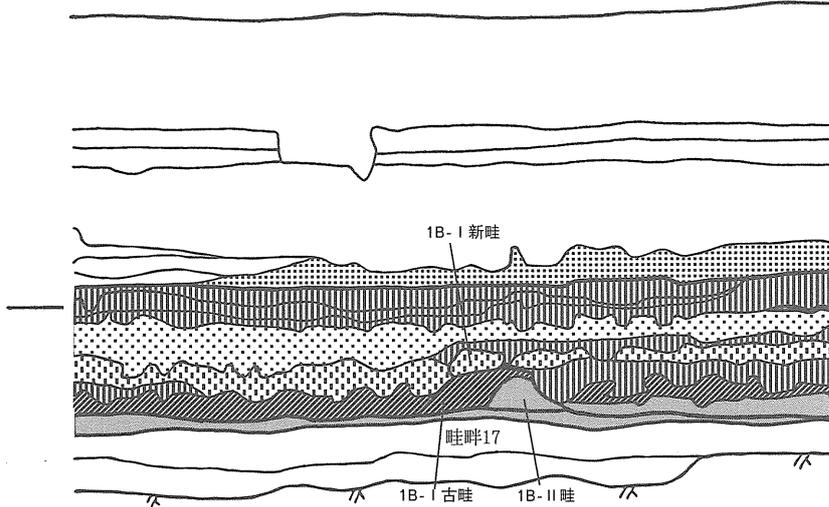
この間に大きく水田の様相が変化する時期が2回ある。1回目は水田1Aの段階で、最も細分化されていた水田1B-IIの段階と比較すると畦畔の数で8条、田面の数で6筆減少し、1筆の面積をその分拡張する。2回目は水田1Cの段階であり、その下層には洪水砂が厚く堆積しているため、全面的に復旧作業を行ったと考えられる段階である。この段階ではそれぞれの田面の高低差が最も小さく、検出された田面のおよそ半分の6筆の田面のレベルが揃っていることが特徴として挙げられる。

また、今回検出された水田は各段階で徐々に田面のレベルが高くなり、最終的に最高で94cm高くなっている。これら復旧されている耕土は洪水の後の自然堆積した土壌を耕土化したとも考えられる。特に水田1Cや水田1Aの段階では洪水砂が取り除かれていない点を考えると洪水砂の後に堆積した土を耕土化したという説もありえるのではないかと思う。ただし、水田1Bの各段階においては一部洪水砂を取り除いていることや復旧が比較的小規模であったことを考えると新たな耕土を入れ、田面を復旧した可能性も考慮に入れておくべきであろう。

なおT14・T15の各水田の時期設定についてはポイントとなる遺物や下層遺構の年代観から割り出した水田全体の時期幅をそれぞれに均等割りしただけで、今後出土遺物等の整理作業が進む上で時期設定の在り方に変更が出るかもしれないことをここで断っておく。



T15 西壁断面図

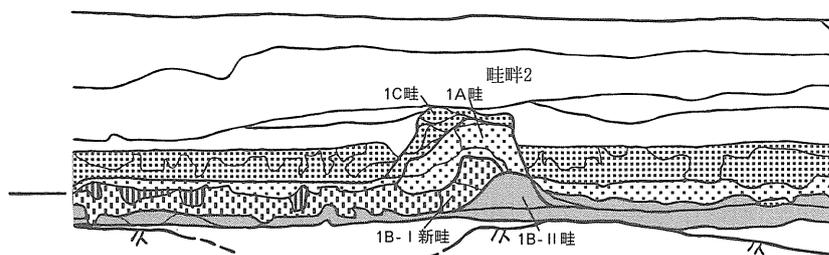


L = 100.500m



- ||||| ... 洪水砂
- ▨ ... 水田 I C 耕土および畦畔
- ▩ ... 水田 I A 耕土および畦畔
- ▧ ... 水田 I B-I 新耕土および畦畔
- ▦ ... 水田 I B-I 古耕土および畦畔
- ▥ ... 水田 I B-II 耕土および畦畔

T14 西壁断面図



L = 100.500m



図版 2

## 6. 畦畔の観察と考察

各水田の段階における畦畔については前節において若干触れているが、ここではT14・T15（平成13年度発掘調査）で検出された畦畔について考察していく。

水田1B-II～水田1Cまでで検出された畦畔は畦畔1～7、9～20で19条である。また各段階で想定される畦畔5条を合わせると総数は24条となる。なお、畦畔8は現地調査時において欠番としている。

### ・畦畔1

T14の北端で検出され、途中大きく南に湾曲する。水田とSR01を画する畦畔である。この畦畔の水田側には幅2.5m、長さ1.5mのスロープがつく。畦畔の存続期間は水田1B-II～水田1Cまでで、水田1Aの段階で一度積み直しが確認できる。検出された全長は約38.8mを測る。

### ・畦畔2

T14北寄りで検出される北西－南東方向の直線的な畦畔である。畦畔1同様水田1B-II～水田1Cの各段階で存在する。水田1B-I新、水田1A、水田1Cの各段階で畦畔の積み直しが確認できる。検出された全長は約22.2mを測る。

### ・畦畔3

T14ほぼ中央で検出される畦畔。畦畔2に並行する畦畔で、T15へと続き、畦畔12に接する。存続期間は水田1B-II～水田1Cであるが、水田1Aの時期に洪水により畦畔が大きく<sup>えぐ</sup>抉り取られた状況を平面調査時に確認している。その後、水田1Cの段階で同じ場所に畦畔を作り直す。またこの畦畔のT15における部分では水田1B-II～水田1Aの時期の水口と考えられる箇所を2ヶ所確認している。この水口は素掘りで側板や仕切り板などは伴わない。検出された畦畔の全長は約55.5mを測る。

### ・畦畔4

T14ほぼ中央で検出される北東－南西方向の畦畔で、畦畔3と5に接する。存続期間は水田1B-II～水田1Aまでで、水田1Cの段階で削平されていると考えられる。検出された全長は約16.7mを測る。存続した各段階での積み直しは確認できていない。

### ・畦畔5

T14・15の中央やや南寄りで検出され、畦畔2や

3に並行する北西－南東方向の畦畔である。T15で畦畔12に接する。水田1Aの段階で積み直しが確認できる。水田1Cの段階では後世の土採り遺構によって削平を受けているため明確な積み直しの痕跡が確認できないが、T14東壁断面において水田1C段階の積み直しあるいは補修と思われる痕跡が確認できる。検出される畦畔の全長は約61.1mを測る。なお、畦畔5以南の田面では水田1Aの耕土は検出されていないため、水田1B-II～水田1Aまで耕土は踏襲されていたと考えられる。

### ・畦畔6

T14・15南寄りで検出される北西－南東方向の畦畔。T15においては約90度南西に屈曲し、畦畔7に接するかたちで検出された。畦畔の積み直しは確認できないが、水田1B-II～水田1Aの各段階で存在していたと考えられる。水田1C段階については断面の状況からだけでは判断ができず、埋没していた可能性もある。検出された全長は47.2mを測る。

### ・畦畔7

T14・15南端で検出される北西－南東方向の畦畔で畦畔12に接する。存続期間は水田1B-II～水田1Cで、水田1Cの段階で積み直しが確認できる。さらに後世の水田の畦畔が同じ場所に作られ、現代まで踏襲される畦畔の一つである。検出された全長は63.9mを測る。

### ・畦畔9

畦畔2と3の間で検出される北西－南東方向の畦畔で畦畔10と接する。存続期間は水田1B-II～水田1B-I新までで、水田1Aの段階で埋没している。畦畔の積み直しは確認できない。検出された全長は約9.2mを測る。

### ・畦畔10

畦畔9に接する北東－南西方向の畦畔である。平面においては畦畔下面の段差のみ検出している。畦畔の存続期間は水田1B-II～水田1B-I新の段階と水田1Cの段階である。水田1Cの段階では現地調査時に確認できていないため、田面上面レベルの検討によって想定したものである。検出された全長は約10mを測る。

### ・畦畔11

T15南端で検出され、畦畔7に接する北東－南西

方向の畦畔。積み直しについては後世の削平により確認できない。存続期間は水田1B-II～水田1Cである。検出された全長は約1.2mを測る。

・畦畔12

T15やや西寄りで見出される北東-南西方向の畦畔で畦畔3および19に続く。また平成12年度調査区のT3・T4間で検出された現在の畦畔と重複し、その畦畔の延長線上に位置する。畦畔11同様後世に削平を受けているため積み直しは確認できない。存続期間は水田1B-II～水田1Cで、検出された全長は約35mである。なお、この畦畔は一部水田1Aの段階で洪水により削平を受け、畦畔の基底部の段差のみを残す部分もある。そのため水田1C段階の畦畔は想定畦畔である。この畦畔を境に西側の田面は東側に比べ、一段低くなる。その高低差は水田1B-II～水田1B-I新の段階では最大51cm、水田1Aの段階で15cmである。このため、この各段階では畦畔12の西側の田面は特に洪水による被害を大きく受けることになった。その後の水田1Cの段階では両側のレベルは100.82mで揃えられる。

・畦畔13

T15北側で見出される北東-南西方向の畦畔で畦畔3に接する。水田1Aの上面を覆う洪水砂の上に作られ、水田1C段階のみに存在する。重機掘削時に平面においても確認している。検出された全長は約11.2mを測る。

・畦畔14

T15北側で見出され、畦畔13に並行する。畦畔13同様水田1Cの段階のみに存在する。水田1Aの下層にはほぼ重複する位置に畦畔19がある。検出された全長は約4.6mを測る。

・畦畔15

T15北側、畦畔13の東側で並行して見出される。水田1B-II～水田1Aまで存在し、水田1Aの段階で洪水によって畦畔の一部が破壊されるため、水田1Cの段階ではすぐ隣の畦畔13に振り替えられるようである。畦畔の積み直しは確認できていない。検出された全長は約11.3mを測る。

・畦畔16

T15南西隅で見出され、畦畔12に接する北西-南東方向の畦畔である。水田1B-II～水田1B-I

新の段階で存在し、水田1Aでは埋没する。水田1B-I新の段階で一度積み直しが確認できる。検出された全長は約9.5mを測る。

・畦畔17

T15西側で見出され、畦畔12に接する北西-南東方向の畦畔である。畦畔16同様、水田1B-II～水田1B-I新の段階で存在し、その各段階で積み直しが確認できる。水田1B-I新の段階の畦畔は洪水により一部が壊され、その上に洪水砂が堆積する状況が断面において確認できる。水田1Aの段階では破棄され埋没している。検出された全長は約14.8mを測る。

・畦畔18

T15北西隅で見出され、畦畔19に接する北西-南東方向の畦畔。水田1B-IIと水田1B-I古の段階のみ存在し、一度積み直しを確認する。水田1B-I新の段階で田面を拡張するために破棄され、埋没している。検出された全長は約13mを測る。

・畦畔19

T15南西隅で見出され、畦畔12に続く北東-南西方向の畦畔。存続期間は水田1B-II～水田1B-I新で、水田1B-I新の段階で一部畦畔の積み直しが確認できる。検出された全長は約11.4mを測る。その後洪水砂に覆われ、水田1Aの段階ではここに畦畔は作られないが水田1C段階ではほぼ重複する位置に畦畔14が作られている。

・畦畔20

T15北西隅で見出され、畦畔18同様水田1B-IIと水田1B-I古の段階のみ存在する。畦畔19に接する北西-南東方向の畦畔。水田1B-I古の段階で積み直しが確認でき、その後洪水砂に覆われ、水田1B-I新の段階では埋没している。検出された全長は約7.3mを測る。

・想定畦畔1～5

先述した以外の畦畔で現地調査時に見出されず、後に断面を検討した結果、いくつか新たな畦畔を想定する必要が出てきたため、それらを想定畦畔とした。それぞれについて簡単に触れておくと、まず想定畦畔1は畦畔2と3の間、畦畔9に続く位置に設定した。水田1B-II～水田1Cの段階まで想定している。つぎに想定畦畔2、3は畦畔7に接する位

置に設定した。想定畦畔2は水田1B-II～水田1B-I新、想定畦畔3は水田1B-II～水田1Cまでをそれぞれ想定している。さらに想定畦畔4は畦畔2と3の間、畦畔10に続く位置に設定した。水田1B-II～水田1Aまで想定している。最後に想定畦畔5は畦畔5と6の間、畦畔6が屈曲する位置から畦畔5に接する位置に設定した。水田1B-II～水田1Aまで想定している。なお、想定畦畔の設定についてくわしくは「補論」で検討している。

以上「畦畔」についてみてきたが、今回検出された畦畔（想定畦畔は除く）は大きく3つのタイプに分類することができる。

1つめのタイプ（A類）は全ての段階の水田で検出される畦畔である。これらは水田を形成する主要な畦畔であると言える。水田の様相が大きく変化する段階にそれぞれ畦畔の積み直しが確認できることが特徴である。畦畔1、畦畔2、畦畔3、畦畔5、畦畔7、畦畔11、畦畔12がこのタイプである。特に畦畔7と12は現代の畦畔の位置と重複していることが確認され、これらの畦畔は条里地割にのると考えられる。また、畦畔1と2の間は最大幅約31mでおおよそ100尺、最小幅約9mで30尺、畦畔2と3の間は約27mでおおよそ90尺、畦畔3と5、畦畔5と7、畦畔11と12の間は約18mでおおよそ60尺をそれぞれ測る。

2つめのタイプ（B類）はある段階で埋没し、破棄される畦畔である。埋没、破棄される段階によってさらに3つのタイプに細分する。まず水田1B-I新の段階で埋没するタイプは畦畔18と20である。つぎに水田1Aの段階で埋没するタイプが畦畔9、畦畔16、畦畔17、畦畔19である。さらに水田1Cの段階で埋没するタイプは畦畔4、畦畔6、畦畔15である。これらの畦畔に共通するのが洪水によって直接被害を受けた後破棄される点である。ただし畦畔4と6に関しては例外であり、全面的に復旧される水田1Cの段階で田面を拡張するため破棄されたと考えられる。

3つめのタイプ（C類）は一度破棄された後ふたたび重複する位置に作られた畦畔である。このタイプは畦畔10と畦畔14である。ともに水田1Aの段階では破棄されていたが、水田1Cの段階でふたたび

作られている。

以上3つのタイプ以外のタイプに畦畔13がある。この畦畔は先述したように水田1Cの段階のみ存在し、畦畔15の西隣に作られているが、下層の畦畔15と位置が重複しない点がC類の畦畔とは異なる特徴である。

## 7. おわりに

これまであまり取り上げられなかった中世の水田跡であるが、柳遺跡の発掘調査では、洪水による川砂の堆積により埋没した水田が検出され、今回機会を得て少しまとめることにしたが、力不足のためとりとめの無い内容になってしまった。さらに深い検討が必要であることは言うまでもないが今回はここまでとなってしまった。

今回見つかった水田は300年以上にわたって存続していたと考えられ、その間幾度となく作り直しがされていた状況がわかり、この水田風景は今でもこの地に残り、検出された一部の畦畔は現代の畦畔に踏襲されていることがわかったことは大きな成果であるといえる。またこの地は洪水にあい易い反面、その洪水により肥沃な土壌が運ばれ、農耕に適した土地となり、交通の便も良いことから要衝の地として青地氏が支配し青地庄と呼ばれていた。その当時の水田が良好な状態で検出され、その変遷が追えたことも大きな成果となった。今後の課題としては周辺の集落との係わりを考え、さらに深い検証が必要であり、今後の整理作業の進展に期待したい。なお、当柳遺跡の正報告書は平成21年度刊行予定である。（さかぐち けんた：財団法人滋賀県文化財保護協会）

## 註

- (1) 「滋賀県の地名」『日本歴史地理体系25』平凡社 1979
- (2) 滋賀県栗太郡役所『近江栗太郡志 3巻』1929
- (3) 馬淵<sup>ひろさだ</sup>広定の四男<sup>もとなつ</sup>基綱が青地右馬助の養子となり青地氏を継いだ。その時期については詳しくわかっていないが基綱の子基氏が弘安4（1281）年に小槻神社に<sup>しんひつ</sup>神櫃を寄進している。『草津市史』第1巻
- (4) 平成13年度の発掘調査で自然流路と堰およびそこから分水するための人工溝が検出され、その下流側には水田の存在が想定されている。

## ＜補論＞

### ～柳遺跡における水田上面レベルの想定～

#### 1. はじめに

今回検出された水田遺構は古い段階から水田1B-II、1B-I古、1B-I新、水田1A、水田1Cであることは本文ですでに触れた。ここでは各水田の段階において水田上面の想定ラインを検討する。

各段階における想定ラインの検討方法については、まず、トレンチ壁面土層断面を使用し、各水田の検出時のレベル（絶対高）をおよそ2mごとに抽出し、各畦畔間における平均値を求める。同時に各畦畔間における最高値も求めておく。ただし、トレンチ断面に表れない畦畔（たとえば畦畔4）についてはこの時点での検討を省略している。こうして求めた平均値と最高値をもとに田面の残り具合や上面の状況（土取遺構による攪乱等）などをふまえ、相対的に判断して想定ラインを決定した。なお、検討段階で若干の実測時の誤差をふまえ、±5のレベル差を基準として平面調査時に検出されなかった新たな畦畔を想定している。（以後想定畦畔と称する）

#### 2. 想定ラインの検討

##### ＜水田1B-II＞

まず、古い順に水田1B-IIから検討を進めていく。水田1B-IIの段階では平面調査時において畦畔1～20が検出されている。しかし、畦畔8については後世の土取り遺構により、平面での検出が十分でないため、その存在について若干の検討が必要である。水田1B-IIは1B-I古とともに、田面が一番細分される段階である。存続期間は13世紀中頃～13世紀末である。それでは各壁面土層断面からの検討に入る。T14西壁土層断面から各畦畔間における検出時のレベルの平均値と最高値を求めると、畦畔1～2間は平均値100.338m、最高値100.380mを測る。畦畔2～9間は100.343m、100.400mを測る。畦畔9～3間は100.410m、100.500mを測る。畦畔3～5間では100.553m、100.620mを測る。畦畔5～6間は100.663m、100.720mをそれぞれ測る。畦畔6～7間は100.730m、100.760mを測り、畦畔7～T14西壁南端では100.770m、100.770mを測るが、

ここは計測距離が短く、測点が少ないためあまりよい資料とならないことを前もって述べておく。以上、T14西壁についてまとめると表1のようになる。

次に同様の作業をT14東壁土層断面で行う。畦畔1～2間では、畦畔2がT14東寄りではSR02にきられているため東壁においては観察できない。そのため平面調査時において検出された畦畔の形状から東壁での位置を想定し、検討に入る。畦畔1～2間の平均値は100.377m、最高値は100.410mを測る。畦畔2～3間では平均値を求める際、およそ10cmのレベル差が出たため、新たな畦畔（想定畦畔1）を設定した。その結果、畦畔2～想定畦畔1間では平均値が100.370m、最高値が100.470mを測る。想定畦畔1～畦畔3間ではそれぞれ100.475m、100.520mを測る。同様に畦畔3～5間では、100.609m、100.720mを測り、畦畔5～6間は平均値が100.692m、最高値が100.720mを測る。畦畔6～7間では100.687m、100.740mを測る。畦畔7～T14東壁南端（Aライン）では測点が少ないが平均値を求める際、およそ12cmのレベル差が出たので畦畔（想定畦畔2）を想定した。畦畔7～想定畦畔2間の平均値は100.785m、最高値は100.820mを測り、想定畦畔2～Aライン間ではそれぞれ100.665m、100.720mを測る。以上の結果をまとめると表2のようになる。

次にT14南壁土層断面とT15南壁土層断面についてあわせてみる。これらの断面は隣り合わせであり、つづけて検討できると判断した。まずT14南壁東端（Aライン）-畦畔8想定位置（畦畔8は後世の土取遺構により削平を受けているため断面観察ができない）間の平均値を求めると途中からおおよそ10cmのレベル差が出たため、そこで畦畔を想定した（想定畦畔3）。これを受け、Aライン～想定畦畔3間では平均値が100.616m、最高値は100.700mを測る。次に先に述べたように畦畔8はその存在について若干検討が必要と判断したので、ここではいったん想定畦畔3～畦畔8想定位置間と畦畔8想定位置～T14南壁西端間を一緒に検討することにした。その結果、想定畦畔3～畦畔8想定位置～T14南壁西端間ではレベル差はさほどなく、平均値は100.707m、最高値は100.740mを測る。続いてT15南壁土層断面ではT15南壁東端～畦畔11間で平均値が100.665

m、最高値が100.740mを測り、ここでも大きなレベル差は認められない。つまり、後でまとめるがここでの断面観察からは畦畔8の存在価値はあまり高くないと判断される。T15南壁の残りの部分についてみると、畦畔11-12間では平均値が100.589m、最高値が100.650mを測り、畦畔12-T15南壁西端間はそれぞれ100.090m、100.160mを測る。以上まとめると表3のようになる。

次にT15西壁土層断面ではT15西壁南端-畦畔16間はあまりに距離が短いため測点が1点のみしか取れないのでここでは省略する。畦畔16-17間は平均値が100.089m、最高値が100.140mを測る。畦畔17-18間はそれぞれ100.077m、100.130mを測り、畦畔18-T15西壁北端(畦畔20)間は平均値が99.970m、最高値が99.990mを測る。これらの結果をまとめると表4のようになる。

つづいてT15北壁土層断面では畦畔20-19間で平均値99.883m、最高値99.940mを測る。畦畔19-15間ではそれぞれ100.263m、100.300mを測り、畦畔15-T15北壁東端間は平均値が100.410m、最高値が100.450mを測る。つづいて断ち割り1、2、試掘坑1南壁の土層断面についてみておく。これらはすべてT15である。まず断ち割り1では平均値が100.527m、最高値が100.580mを測る。断割2では畦畔3-断ち割り2北端間で平均値、最高値とも100.300mである。つづいて試掘坑1南壁では東端-畦畔12間で平均値100.535m、最高値100.580mを測り、畦畔12-西端間ではそれぞれ99.984mと100.060mを測る。以上、T15北壁と断ち割り1、2、試掘坑1についてまとめると表5になる。

以上ここまで各壁面土層断面についてみてきたが、ここで水田1B-IIについて簡単にまとめておく。水田1B-IIは最初に開かれた水田であり、今回検出された水田で1番細かく区画された水田である。平面調査において確認された畦畔は畦畔1~12、15~20である。しかし先にも触れたように畦畔8は後世の土取り遺構により削平されているため、平面での検出が不十分であったことに加え、断面による検証でもその存在が疑問視される。これらの理由により畦畔8は欠番とした。よって平面調査において確認された水田1B-II段階の畦畔は畦畔1~7、9

~12、15~20の17条である。それに断面検証時に想定した畦畔を加えると、その総数は20条となる。

これら以上の結果をふまえ、水田1B-IIにおける水田面の想定ラインを決定していくことにする。想定ラインを決める際は基本的に各畦畔間の最高値を優先させるが、直上の状況や最高値と平均値に大きな差があるときや最高値がその1点だけ突出しているとき、その他平均値を採用したほうがよいと判断されるときはその優先順位が変化する。

まず、畦畔1と畦畔2で区画された水田面はT14東壁で確認された100.41mが最高値であるがT14西壁のほうがより多くの情報が残っているため西壁における最高値である100.38m(これは東壁における平均値でもある。)を想定ラインとして採用することにした。次に畦畔2と畦畔9、10(畦畔9、10とも平面においては、水田1Aの耕作時に削平を受けていると考えられ、検出されていない)で区画された水田面はT14西壁で確認された最高値100.40mをそのまま想定ラインとして採用した。つづいて畦畔9と畦畔3、15で区画された水田面については、T14西壁とT15北壁で求められた平均値(100.41m)とT14東壁で求めた平均値(100.48m)で5cm以上のレベル差が認められることから、畦畔9と畦畔3の間に南北畦畔が想定される可能性があり、同じく南北畦畔である畦畔10のつづきに想定畦畔4を設定した。この結果畦畔9と畦畔3、15、想定畦畔4で区画される水田面ができる。この水田面の想定ラインは、T14西壁での最高値(100.50m)がほかではみられず一点だけ突出しているため、T15北壁の最高値の100.45mを採用した。なお、その面の東隣にある想定畦畔1、4と畦畔3で区画される水田面はT14東壁での最高値である100.52mを想定ラインとした。また、畦畔3、15、19で区画された水田面はT15北壁と断ち割り2で最高値がともに100.30mを測ることから、それを想定ラインとする。次に畦畔3、4、5と12で区画される水田面はT14・T15にまたがっているがT14西壁の最高値(100.62m)が1点だけ突出していることから、T15の断割1と試掘坑1の最高値である100.58mを想定ラインとする。この水田の東隣である畦畔3、4、5で区画される水田面の想定ラインはT14東壁における最高値100.

66mとした。次に畦畔5と6で区画される水田面であるが、T14においては西壁、東壁ともに最高値で100.72mを測るためそのまま想定ラインとした。しかし、T15については断面による情報がひとつもないため、平面調査時のレベル（2.5mメッシュで計測）から平均値と最高値を求めた。その結果平均値で100.630m、最高値で100.710mを測ったが最高値はその1点のみであったためここでは平均値（100.63m）を想定ラインとした。しかしここで問題が発生する。このT14とT15にまたがる畦畔5と6で区画される水田は同一の水田と考えられていたにもかかわらず、想定ラインでおおよそ9cmものレベル差が出てしまったことである。このため新たな畦畔を想定する必要が出てきた。畦畔を想定する位置についてはまず考えられる位置は、畦畔6がおおよそ90°東に屈曲するところであるため、その屈曲点から畦畔5に向かって想定畦畔5を設定した。しかしT15の面では断面の情報がなく、平面掘削時の掘り過ぎの可能性を考慮に入れると、あまり積極的に畦畔を設定できないため、ここではその可能性を指摘するとどめる。次に畦畔6と7で区画される水田面であるが、T14西壁の状況があまりよくないこともふまえ、T14東壁の最高値である100.74mを想定ラインとする。つづいて畦畔7から南の水田面であるが、ここでは検討材料となる断面がひとつずつしかないがその中で想定ラインを決めていく。畦畔7と想定畦畔2で区画される水田面は情報が少ないが、最高値（100.80m）が畦畔7寄りであったため平均値である100.73mを想定ラインとした。畦畔7と想定畦畔2、3により区画される水田面は最高値で100.70mを測るが、全体に安定的にみられる平均値100.62mのほうがより信頼できる検討材料であると判断し、ここでは100.62mを想定ラインとした。次に想定畦畔3と畦畔7、11で区画される水田面はT14とT15にまたがっているが、ともに最高値が100.74mを測ることから想定ラインとした。つづいて畦畔7、11、12で区画される水田面では最高値が100.65mを測る。先ほどの田面と比べると10cmほどレベルが低い、上面（水田1C）も同じように周りに比べ面が下がるため、この水田面の想定ラインを100.65mとした。次に畦畔12より西側で検出された水田面についてみ

ていく。これらの水田面は畦畔12の東側の水田面に比べるとおおよそ30～50cm低くなるが、これは水田1B-IIが開墾される段階でもともと谷地形のために西向かって緩傾斜している地山をさらにさらにある程度人為的に削り、大きく段差を作って条理地割にのっとって水田面を作ったと考えられるためである。まず畦畔12、16で区画される水田面はT15南壁での最高値が100.14mを、上面の状況も安定していることから想定ラインとした。次に畦畔12、16、17で区画される水田面でも最高値が100.14mを測り、同様に想定ラインとした。畦畔12、17、18で区画される水田面の断面には表れないが平面では灰色砂の入る足跡などを検出している。これは洪水砂が水田1B-IIの田面を覆い、その後復旧作業をした（洪水砂を取り除くときに踏み込まれた砂だけが足跡として平面に残り、その上に新たな耕土＝水田1B-I古を復旧している）ためと考えられる。しかしこの水田面では全体に足跡が広がっていないため、さほど洪水によって耕土が削平されたとは考えられないのでT15西壁での最高値100.13mをもって想定ラインとする。次に畦畔18、19、20で区画された水田面は先ほどの田面と同じ状況が断面より観察できる（しかしこの水田面では足跡が全体に広がっている）ことから、ここでも洪水砂だけを取り除きその上に耕土を復旧していると考えられる。さらにほぼ全体に安定して耕土が残っていることからこの水田面の想定ラインはT15西壁での最高値99.99mとする。最後に畦畔19と20で区画された水田面も先の田面と同じ理由によりT15北壁での最高値99.98mを想定ラインとした。

以上が水田1B-II段階の各水田面の想定ラインである。水田1B-II段階の畦畔をあわせて22条で水田面の数は20筆を数える。畦畔20を境にその西側では大きく田面が低くなるが全体的に南が高く、北に向かって徐々に低くなっていく状況がうかがえる。調査区の南には現在農業用水路の柳川が流れているが、周辺の水田も当時の条里地割（栗田郡主条里N38°E）が踏襲されているので、柳川も水田1B-IIが開かれたときから存在するとも考えられる。水田への取水はこの柳川から行われていたと考えられる。また畦畔3では水口1、2が検出され、とも

に北側の田面への導水施設と考えられる。排水に関しては畦畔1に北側で検出されているSR01およびT15西側に存在が予想される流路への排水の可能性を考えている。また水田1B-IIの直下では多くの耕作溝（水田1B-IIにともなうものか現在のところ不明）が検出されている。

#### <水田1B-I古>

水田1B-I古は水田1B-IIの一部が洪水被害にあった後復旧された田面である。水田1B-II上面を覆う洪水砂は畦畔12、19の西側で北壁から畦畔17までの間で検出される。その洪水砂を取り除き、水田1B-I古の耕土が作られる。復旧された水田面は3筆である。それら以外の水田に関しては水田1B-II時の耕土をそのまま続けて使用していると考えられる。存続期間は13世紀末～14世紀中頃と考えられる。

それでは水田1B-I古について検証していく。まず、T15西壁土層断面から各畦畔間の平均値と最高値を求めていく。畦畔17-18間では平均値は100.223m、最高値は100.270mを測り、畦畔18-T15西壁北端（畦畔20）間ではそれぞれ100.153mと100.180mを測る。T15北壁土層断面においては、畦畔20-19間で平均値が100.000m、最高値が100.060mを測る。これをまとめると表6のようになる。この結果から水田1B-I古の想定ラインを決めていく。

水田1B-I古の耕土の上には洪水砂が残っていることがT15西壁から確認できるため、若干の洪水による削平も考えながら想定ラインを決定する。まず畦畔12、17、18で区画された水田では洪水砂が残るところと残っていないところがある。洪水砂が残るところは畦畔17寄りであり、畦畔18寄りでは洪水砂は復旧時に取り除かれていたか直上の水田（水田1B-I新）の耕作時に攪拌されたと考えられる。よって洪水砂が残るところはある程度水田1B-I古の耕土を削って洪水砂が堆積し、砂が厚く堆積した分耕土化されず残っていると判断した。したがってここでは畦畔18寄りで確認された最高値100.27mを想定ラインとすることにした。また畦12、18、20で区画される水田においても同様の見解から最高値100.18mを想定ラインとした。つづいて畦畔19、20で区画される水田についても洪水被害後の復旧作業

など同様の状況がうかがえることからT15北壁での最高値100.06mを想定ラインとした。この結果、それぞれの水田面は水田1B-IIからおよそ15～20cm上に新たな田面を復旧し、水田1B-II時におけるそれぞれの田面のレベル差がほぼそのまま水田1B-I古時にもあったことがわかった。なお、畦畔の数や田面の数は水田1B-IIの時と変わらない。

#### <水田1B-I新>

水田1B-I新は水田1B-I古が再び洪水による被害を受けた後作られた水田である。その範囲は畦畔12、19より西側の部分と畦畔2、9、10で区画される水田面である。この段階では畦畔18と畦畔20がなくなるが、畦畔17から南側の水田面は水田1B-I古上面の洪水砂と同一と思われる洪水砂が若干踏み込み等の中に残っていることから大量ではなくても少しは洪水砂が畦畔17を超えてきていたことがわかる。そのため水田1B-I新の段階ではT15北端から畦畔16までの範囲に新たな田面を作っている。それ以外の田面については水田1B-I古と同様に水田1B-Iの時のままである。存続期間は14世紀中頃～14世紀末と考えられる。

それではT15両壁土層断面について検討していく。16-17間は平均値が100.186m、最高値が100.250mを測る。畦畔17から北側に関しては先にも述べたように畦畔18と20がこの段階でなくなるためT15西壁北端までつづけてみていく。畦畔17-T15西壁北端間の平均値は100.276m、最高値は100.320mを測る。またT14西壁において畦畔2-9間は平均値が100.430m、最高値は100.500mを測る。これをまとめると表7になる。

これらを踏まえて水田1B-I新段階の各水田面の想定ラインを検討していく。畦畔12、16、17で区画される水田は直上の水田1Aの耕作状況（水田1B-I新上面の洪水砂が水田1A段階に耕土化されているため途中で無くなる）などを考慮し、平均値よりも想定ラインを反映すると思われる最高値の100.25mを想定ラインとした。次に畦畔12、17、19で区画された水田では水田1B-I新上面の洪水砂がよく残っていることもあり、さほど水田Aの影響は受けていないと考えられる。ここでは最高値100.32mを想定ラインとした。畦畔2、9、10で区画される水

田については最高値が1点だけ突出し、平均値のほうがより想定ラインを反映すると判断し、平均値10.43mを想定ラインとした。またこの区画では足跡の列を7～8条検出している。

水田1B-I 新の段階では畦畔12、19より西側の状況が水田1B-II、水田1B-I 古の時とかなり変わってくる。水田1B-IIと水田1B-I 古の時は南から北に向かって各水田面が低くなっていくのに対し、水田1B-I 新では逆に南に向かって低くなっていく。これは2度（小さな洪水はこれ以上、数回あったと思われるが）にわたる大きな洪水被害を経験し、調査区の北もしくは北西方向にあったと推定される流路からの洪水を警戒し、意識しての復旧ではないかと考える。しかしその警戒、対策もむなしく、三度、大きな洪水被害を受けることとなる。しかもその洪水は予想を越えたものであり、畦畔12を超えてその東側にまで洪水砂が及ぶものであった。その結果、調査区全域にわたって復旧作業がされることとなる。その水田が水田1Aである。

#### ＜水田1A＞

水田1Aは水田1B-I 新が洪水被害を受けた後、その洪水砂が及んだ田面を中心に復旧された水田である。存続期間は14世期末～15世紀後半と考えられる。水田1B-IIから水田1B-I 新の時期の水田に比べると洪水被害を大きく受けた部分の畦畔の数を減らしていることが特徴的である。また、畦畔5から北側の水田では新たな耕土をつくり水田面を全体に高くしているが、その南側では水田1B-IIの耕土をそのまま利用していると考えられる。平面調査時に確認されている畦畔は畦畔1～7、11、12、15の10条である。

まず、T14西壁土層断面から検討に入る。畦畔1～2間の平均値は100.470m、最高値は100.520mを測る。畦畔2～3間では平均値100.482m、最高値100.600mを測る。畦畔3～5間ではそれぞれ100.623mと100.660mを測る。畦畔5～6間は水田Cの耕作の影響を受け1Aの耕土の残りが悪いが、一応耕土は確認できる。測点は少ないが、平均値、最高値とも100.720mを測る。畦畔6～7間と畦畔7～T14西壁南端間は水田1Aの耕土自体は認められないが、水田1B-IIの耕土が1A期にも使われていたと考

えられるため、この間については水田1B-IIで検証した数値を水田1A段階においても採用する。これらをまとめると表8になる。

次にT14東壁土層断面についてみていく。畦畔1～2間では＜水田1B-II＞で触れたように、畦畔2が東壁で表れていないので位置を想定し、検討に入った。平均値は100.460m、最高値が100.510mを測る。畦畔2～3間では水田1B-IIのときに想定畦畔1を設定しているが、水田1Aにおいても同様におよそ10cmのレベル差が認められることから、想定畦畔1を使い各畦畔間の平均値と最高値を求めていく。畦畔2～想定畦畔1間は平均値が100.502m、最高値が100.520mを測る。想定畦畔1～畦畔3間は平均値が100.603m、最高値が100.620mを測る。畦畔3～5間では平均値が100.666m、最高値が100.730mを測り、畦畔5～6間では平均値が100.715m、最高値が100.740mを測る。畦畔6～7間はT14西壁と同様に水田Aの耕土が見られない。そのため＜水田1B-II＞で想定したラインをそのまま使う。畦畔7～T14東壁南端（Aライン）間は先に想定した想定畦畔2より南側で若干水田Aの耕土が残るが、想定畦畔2を削平して、田面を広げている状況がうかがえる。よって畦畔7～想定畦畔3間で平均値と最高値を求めることにした。平均値は100.730m、最高値は100.780mを測る。

つづいてT14南壁土層断面とT15南壁土層断面についてみていく。T14南壁東端～想定畦畔3間は先ほど検証した。想定畦畔3～畦畔11間と畦畔11～12間は水田1Aの耕土が認められないので、まわりの田面と同様に水田1B-IIの想定ラインをそのまま水田1Aの想定ラインとした。畦畔12～T15南壁西端間では平均値が100.383m、最高値が100.500mを測る。以上、T14東壁とT14南壁、T15南壁についてまとめると表9のようになる。

次にT15西壁土層断面とT15北壁土層断面についてつづけてみていく。T15西壁では水田1B-IIの段階では畦畔16、17、18があったが、水田1Aではそれらの上に耕土を作っているため、T15西壁の南端から北端までを1つの面としてみていく。ここは洪水被害を大きく受けた後に耕土を復旧しているため、水田1B-IIの段階に比べるとかなり田面が高

くなっている。ここでの平均値は100.420m、最高値は100.500mを測る。次にT15北壁土層断面については、T15西壁と同様に畦畔19、20が水田1Aの段階でなくなるため、T15北壁西端-畦畔15間の平均値と最高値から求めると、平均値では、100.381m、最高値は100.400mを測る。ここでは水田1A上面の洪水によってかなり耕土がえぐられた状況が断面で確認できることや、平面においても畦畔が洪水によってえぐり取られている状況が確認できることから、本来の上面よりは平均値、最高値ともに低い数値を示すと考えられる。畦畔15-T15北壁西端間は平均値が100.477m、最高値が100.500mを測る。以上T15西壁、北壁についてまとめると表10になる。

最後に<水田1B-II>と同じように断ち割り1、2、試掘坑1南壁の土層断面をみておく。まず断ち割り1では平均値が100.659m、最高値が100.720mを測る。断ち割り2では畦畔3-断ち割り2北端間で平均値が100.380m、最高値が100.400mとT15北壁における数値と似た結果を示す。つづいて試掘坑1南壁では試掘坑1東端-畦畔12間で平均値が100.675m、最高値が100.720mを測る。畦畔12-試掘坑1西端間は平均値が100.378m、最高値が100.420mを測る。これをまとめると表11になる。

以上これらの結果から水田1Aの各水田面の想定ラインを求めていくが、ここで水田1Aについて簡単にまとめておく。水田1Aの畦畔ははじめにも触れたように平面調査時に検出されているのが10条である。それ以外に想定した想定畦畔1、3、4、5をあわせると合計で14条である。水田面は12筆である。田面は水田1B-II段階に比べると1筆1筆を拡張し、田面自体も高くなる。しかしそれは洪水被害にあい、洪水砂が堆積した田面に限られる。それ以外の田面は水田1B-IIの耕土を踏襲していると考えられる。

それでは水田1Aにおける各水田面の想定ラインの検討に入る。畦畔1と2で区画される水田は最高値がT14西壁の100.52mになるが、その直上の水田1Cの耕土と見分けがつきにくく、線引きがあいまいなところもあるため、T14東壁の最高値100.51mを想定ラインとする。畦畔2と3、15で区画される水田面ではT14西壁で最高値100.60mを測るが、この

1点のみ突出していることもあり、この水田面全体の平均値(100.48m)に最も近いT15北壁での最高値100.50mを想定ラインとしたほうが良いと判断した。なおこの段階で畦畔9と10は無くなっている。そして水田1B-IIのときに設定した想定畦畔1と4で区画される水田面はこの段階でもレベル差がみられるため想定畦畔は存続させる。なおこの田面の想定ラインはT14東壁の平均値100.60mとした。次に畦畔3、4、5と12で区画される水田面については断ち割り1での最高値100.72mを想定ラインとした。また、その田面の東隣にある畦畔3、4、5で区画される水田面についてはT14東壁の最高値100.73mを想定ラインとしている。次に畦畔7と想定畦畔3で区画される水田面は水田1B-II段階にあった想定畦畔2をなくし、水田を拡張している。想定ラインとしてはT14南壁での平均値100.73mが考えられる(最高値100.78mを測るが畦畔近くでとった点であり、ここでは参考としなかった)。この100.73mの想定ラインは水田1B-II段階の畦畔7と想定畦畔2で区画される水田面の想定ラインと同じであり、水田1Aの段階で水田面をそろえたと考えられる。つぎに畦畔12と19の西側の水田面であるが、畦畔16から20を覆うかたちで水田1Aが作られている。T15南壁と西壁ではともに最高値100.50mを測るが、T15北壁では最高値は西壁よりも10cm低く、100.40mである。これはT15北壁寄りでは畦畔3をえぐり取るぐらいの洪水があり、水田1Aの耕土もそのとき削平されているためと考えられる。よって想定ラインは100.50mとした。最後に、畦畔5から南の水田では水田1Aの耕土がみられない。(一部例外はある。例えば畦畔7と想定畦畔3で区画される水田であるが、これは先ほど検討済みである)。そのため、水田1B-II段階の耕土をそのまま水田1Aにおいても利用していると考えられ、水田1B-IIの想定ラインを水田1Aにおいても採用する。その範囲は畦畔5、6と想定畦畔5で区画される水田面、畦畔6、7で区画される水田面、畦畔7、11と想定畦畔3で区画される水田面、畦畔5、7、12と想定畦畔5で区画される水田面、畦畔7、11、12で区画される水田面の合計5筆の水田面にわたる。これはこれらの水田の北側にある水田面の想定ライン

が100.72mと100.73mであることから、畦畔3から南側の水田面をそろえるため必要な部分に耕土を足し、それ以外の田面は水田1B-IIの耕土をそのまま利用したものと考えられる。以上が水田1Aの想定ラインの検討である。

水田1Bの段階で3度にわたる洪水を経験し、水田1Aの段階で田面を全体に高くしている状況がうかがえる。しかしその洪水に対する対策もむなしく、4度目の大きな洪水被害を受けることとなる。しかもその洪水は今までの洪水の中での一番大きな被害をもたらした。畦畔3や田面をえぐるほどの流れがあり、洪水砂が厚く堆積した。その結果、再び調査区の全域にわたって復旧作業がされることになる。この復旧作業は堆積した洪水砂の上にまったく新しい田面が作られ、大規模に行われていることから、かなり組織だった復旧作業であったと考えられる。

#### <水田1C>

水田1Cは先に述べたように水田1A上面の洪水砂の上に復旧された水田である。存続期間は15世紀後半以降である。水田1Cは平面による調査ができていないため、畦畔に関しても断面でのみしか確認できない。ただし、畦畔14、15に関しては重機掘削の段階で平面においても確認されている。トレンチ壁面土層断面から確認できる畦畔は畦畔1~3、5、7、11、12の7条と平面で確認できた2条をあわせると現在9条である。なお、平面における畦畔の形は、水田1Aの畦畔の上に水田1Cの畦畔をのせていることが断面において確認されるため、水田1A段階の形を踏襲させて検討に入る。

では、各壁面土層断面の検討に入る。まずT14西壁の土層断面については畦畔1-2間の平均値が100.620m、最高値が100.670mを測る。畦畔2-3間（畦畔9はすでに水田1A段階になくなっている）では平均値が100.629m、最高値が100.670mをそれぞれ測る。畦畔3-5間は平均値が100.690m、最高値が100.720mを測り、畦畔5-7間は平均値で100.770m、最高値で100.820mを測る。畦畔7-T14西壁南端間でもそれぞれ100.870m、100.890mとなるが、土取遺構があることや距離があまりにも短いのであまり良い資料とならないことを前もって示しておく。以上T14西壁土層断面についてまとめる

と表12になる。

つぎにT14東壁土層断面についてみていく。畦畔1-2間は後世の土取り遺構などにより水田1Cの耕土が確認できていない。また、畦畔2も先に述べたように東壁においてはSR02にきられているため断面での観察ができないが、水田1A段階の形から東壁での位置を想定している。畦畔2-3間では平均値を求める際、水田1A段階と同じようによそ10cmのレベル差が出たためここでも想定畦畔1を想定する。その結果、畦畔2-想定畦畔1間では平均値で100.594m、最高値で100.620mを測る。想定畦畔1-畦畔3間ではそれぞれ100.689m、100.710mを測り、畦畔3-5間では平均値100.743m、最高値100.780mを測る。畦畔5-6間は平均値で100.808m、最高値で100.840mをそれぞれ測る。畦畔7-Aライン間では平均値が100.830m、最高値が100.890mを測る。以上をまとめると表13になる。

つぎにT14南壁土層断面とT15南壁土層断面についてみていく。まずAラインから畦畔8までの平均値と最高値を求めたところ、最高値でおよそ7cmの差が出たため、水田1Aと同様に想定畦畔3を想定する。Aライン-想定畦畔4間は平均値が100.746m、最高値が100.750mを測る。想定畦畔3-T14南壁西端間とT15南壁東端-畦畔11間はひとつの水田面と考えられることから、想定畦畔3-畦畔11間で検討し、平均値が100.790m、最高値が100.820mを測る。畦畔11-畦畔12間は平均値が100.690m、最高値が100.780mを測る。畦畔12-T15南壁西端間では平均値が100.760m、最高値が100.82mを測る。これをまとめると表14になる。

次に、T15西壁土層断面とT15北壁土層断面についてみていく。T15西壁については水田1Aと同じ状況があり、ひとつの水田面として判断できる。T15西壁での平均値は100.750m、最高値は100.820mを測る。T15北壁土層断面からはT15北壁西端-畦畔14間で平均値100.720m、最高値100.760mを測る。畦畔14-畦畔13間では平均値が100.720m、最高値が100.760mを測る。畦畔13-T15北壁西端間では平均値が100.650mと最高値が100.700mを測る。これをまとめると表15になる。

最後に断ち割り1、2と試掘坑1についてみてお

く。断ち割り 1 では最高値が100.780m、最高値が100.820mを測る。断ち割り 2 では平均値が100.690m、最高値が100.700mを測る。試掘坑 1 では平均値が100.800m、最高値が100.820mを測る。これをまとめると表16になる。

以上が各壁面土層断面の平均値と最高値の結果であるが、これをふまえて以下水田 1 Cの想定ラインを検討していく。

まず、畦畔 1 と畦畔 2 で区画される水田面は断面の情報がT14西壁でしか確認できない。したがってT14西壁での最高値である100.67mを想定ラインとする。畦畔 2、3 と13で区画される水田面はT14東壁において想定畦畔 1 を設定しているため田面が2筆に分割される。そのため断面では表れないが、畦畔10を想定し、想定畦畔 1 と畦畔10で区画される水田面をつくった。この水田面の想定ラインはT14東壁より、最高値100.62mを採用した。また、畦畔 2、3 と13で区画されるそれ以外の水田面はT14東壁の最高値100.71mを想定ラインとした。次に、畦畔 3 と13、14で区画される水田面はT15北壁の最高値である100.76mを想定ラインとした。つづいて畦畔 3、5 と12で区画される水田は今回観察した各断面で若干のレベル差がみられる。例えば最高値ではT14西壁が100.72m、T14東壁が100.78mとなる。しかし断ち割り 1 と試掘坑 1 でともに最高値が100.82mを測り、T14西壁とT14東壁では土取遺構など攪乱を大きく受けているなどの理由からここでの想定ラインは100.82mにするのが妥当であると考え。畦畔 5、6、7 と12で区画される水田はT14東壁で最高値が100.84mを測るが、全体の平均値に最も近いT14西壁の最高値100.82mを想定ラインとした。畦畔 7 と想定畦畔 3 で区画される水田面はT14東壁で最高値が100.89mを測るがT14南壁の最高値とあわせて考えるとT14東壁の平均値である100.83mがより本来の水田面上面を反映していると考え。よって想定ラインは100.83mとした。想定畦畔 3 と畦畔 7、11で区画される水田はT14南壁、T15南壁ともに同じ最高値100.82mを測ることから想定ラインとした。畦畔 7 と11、12で区画される水田面はT15南壁の最高値が100.78mを測るが、この 1 点のみ突出し、ほかはレベルがほぼそろってくることからT15南壁の

平均値である100.69mを想定ラインとする。最後に畦畔12、14より西側の水田は水田1A時と同様に畦畔16、17、18、20がなくなり、大きな1筆としている。ここではT15南壁とT15西壁の最高値がともに100.82mを測ることからこれを想定ラインとした。

ここまで水田1Cの想定ラインを検討してきたが、ここまでで畦畔の数は13条、水田面の数は11筆を数える。これは今回検出された水田で最も畦畔の数が少なく、1筆1筆の田面が大きくなる時期である。また畦畔3を境にその南側ではおよそ100.82mで面をそろえ、北側では一段面を低くしている状況が確認できた。その理由としては幾度となく洪水にあったこととSR01に排水をしていたことが考えられるだろう。

### 3. まとめ

今回検出された水田遺構は合計で5回の作り直しを確認できた。水田が最初に開墾されたのは13世紀中頃と考えられ、一部地山を削って条里地割にのった水田を作っている。このことからかなりの組織力をもって水田を開いていたことが想像される。また、幾度となく洪水被害にみまわれるがその都度水田を復旧し、耕作を続けていたことが確認できた。最初に開かれた水田は畦畔が22条で水田面は20筆を数える。これが今回検出された水田の中では最も小区画される時期となる。その後洪水被害にあう度に田面を高くし、1筆1筆を拡張していき、最終的に15世紀末に開かれた水田は畦畔が13条、田面が11筆となる。その間、各田面の段差のつけ方にも変化がみられる。まず、水田1B-II～1B-I 新の段階では調査区の南が高く、北に向かって段々に田面が低くなる。さらに畦畔12、19より西側でもう一段低くなる。その後水田1Aの段階になると南寄りが高くなるのは変わらないが、畦畔12、19より西側の田面と畦畔3から北側の水田のレベルをほぼそろえる。水田1Cの段階になると、畦畔12、19より西側の田面も調査区南側（畦畔3から南）のレベルに合わせ、畦畔3から北側ではSR01（調査区北側）に向かって段をつけ、田面を低くしていることが確認できた。各時期において段差のつけ方が変化するという事はこの地が洪水被害を受けやすいため、その対策と

編集後記

今年度も、全国の遺跡で数多くの発見が新聞紙上を賑わせました。県内においても、膳所城下町遺跡・鍛冶屋敷遺跡をはじめとして多くの遺跡調査で成果を挙げることができました。そして現地説明会では、多くの考古学ファンや地元の方々に見学していただくことができました。

今号に掲載されている論考は、遺構・遺跡論から保存科学と幅広く、多岐にわたり、今年度の発掘調査に関連する最新情報や成果を反映させたものも含まれています。これらの論考が、埋蔵文化財の調査に携わる者の一助となり、我々の仕事である文化財の保護・普及活動の一翼を担っていくものと信じております。

m( )m

平成15年(2003年)3月

紀 要 第 16 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

電話 (077)548-9780・9781

FAX (077)543-1525

URL <http://www.shiga-bunkazai.jp/>

E-mail [mail@shiga-bunkazai.jp](mailto:mail@shiga-bunkazai.jp)

印刷・製本 (株)スマイ印刷工業

栗東市川辺568番地2

TEL 077-552-1045

して洪水のきた方向の田面を高くしていった結果であると考えられる。

また、先にも述べたがこの水田は栗太郡統一主条里にのっとってつくられていることがわかっている。このことから13世紀中頃にはこの地にも条里地割が施行されていたことがわかった。中世においては既に灌漑用水路を含め、大規模な水田耕作地化が可能

な労働力と組織力があつたことが知られているが、今回の調査でもそれが裏付けられた。さらにこの水田は調査区外にもかなり広がっていたと予想され、この条里地割は現在の水田まで踏襲されると考えられる。

表1 T14 西壁 水田1B-II

	畦畔1- 畦畔2	畦畔2- 畦畔9	畦畔9- 畦畔3	畦畔3- 畦畔5	畦畔5- 畦畔6	畦畔6- 畦畔7	畦畔7- 南端
平均値(m)	100.34	100.34	100.41	100.55	100.66	100.73	100.77
最高値(m)	100.38	100.40	100.50	100.62	100.72	100.76	100.77

(小数点以下第三位を四捨五入)

表2 T14 東壁 水田1B-II

	畦畔1- 畦畔2	畦畔2- 想定畦畔1	想定畦畔 1-畦畔3	畦畔3- 畦畔5	畦畔5- 畦畔6	畦畔6- 畦畔7	畦畔7- 想定畦畔 2	想定畦畔 2-Aライン
平均値(m)	100.38	100.37	100.48	100.61	100.69	100.69	100.79	100.67
最高値(m)	100.41	100.47	100.52	100.72	100.72	100.72	100.82	100.72

表3 T14 南壁 T15 南壁 水田1B-II

	Aライン- 想定畦畔3	想定畦畔 3-西端	T15東端- 畦畔11	畦畔11- 畦畔12	畦畔12- T15西端
平均値(m)	100.62	100.71	100.67	100.59	100.09
最高値(m)	100.70	100.74	100.74	100.65	100.16

表4 T15 西壁 水田1B-II

	畦畔16- 畦畔17	畦畔17- 畦畔18	畦畔18- 畦畔20
平均値(m)	100.09	100.08	99.97
最高値(m)	100.14	100.13	99.99

表5 T15 北壁, 断ち割り1・2, 試験掘坑1 水田1B-II

	畦畔20- 畦畔21	畦畔19- 畦畔15	畦畔15- T15東端	断ち割り	畦畔3- 断ち割り 2北	試1東端- 畦畔12	畦畔12- 試1西端
平均値(m)	99.88	100.26	100.41	100.53	100.30	100.54	99.98
最高値(m)	99.94	100.30	100.45	100.58	100.30	100.58	100.06

表6 T15 西壁, 北壁 水田1B-I古

	畦畔17- 畦畔18	畦畔18- 畦畔20	畦畔20- 畦畔19
平均値(m)	100.22	100.15	100.00
最高値(m)	100.27	100.18	100.06

表7 T15 西壁, 水田1B-I新

	畦畔16- 畦畔17	畦畔17- 畦畔20	畦畔2- 畦畔9
平均値(m)	100.19	100.28	100.43
最高値(m)	100.25	100.32	100.50

表8 T14 西壁 水田1A

	畦畔1- 畦畔2	畦畔2- 畦畔3	畦畔3- 畦畔5	畦畔5- 畦畔6	畦畔6- 畦畔7	畦畔7- T14西端
平均値(m)	100.47	100.48	100.62	100.72	100.73	100.77
最高値(m)	100.52	100.60	100.66	100.72	100.76	100.77

表9 T14 東壁, 南壁・T15 南壁 水田1A

	畦畔1－ 畦畔2	畦畔2－ 想定畦畔1	想定畦畔 1－畦畔3	畦畔3－ 畦畔5	畦畔5－ 畦畔6	畦畔6－ 畦畔7	畦畔7－ 想定畦畔3	想定畦畔 3－畦畔11	畦畔11－ 畦畔12	畦畔12－ T15西端
平均値(m)	100.46	100.50	100.60	100.67	100.72	100.73	100.73	100.71	100.59	100.38
最高値(m)	100.51	100.52	100.62	100.73	100.74	100.76	100.78	100.74	100.65	100.50

表10 T15 西壁, 北壁 水田1A

	T15南端－ 北端	畦畔20－ 畦畔15	畦畔15－ T15東端
平均値(m)	100.42	100.38	100.48
最高値(m)	100.52	100.40	100.50

表11 断ち割り1・2, 試掘坑1 水田1A

	断ち割り1	畦畔3－ 断ち割り 2北	試1東端－ 畦畔12	畦畔12－ 試1西端
平均値(m)	100.66	100.38	100.68	100.38
最高値(m)	100.72	100.40	100.72	100.42

表12 T14 西壁 水田1C

	畦畔1－ 畦畔2	畦畔2－ 畦畔3	畦畔3－ 畦畔5	畦畔5－ 畦畔7	畦畔7－ Aライン
平均値(m)	100.62	100.63	100.69	100.77	100.87
最高値(m)	100.67	100.67	100.72	100.82	100.89 (100.87)

表13 T14 東壁 水田1C

	畦畔1－ 畦畔2	畦畔2－ 想定畦畔1	想定畦畔1－ 畦畔3	畦畔3－ 畦畔5	畦畔5－ 畦畔7	畦畔7－ Aライン
平均値(m)	—	100.59	100.69	100.74	100.81	100.83
最高値(m)	—	100.62	100.71	100.78	100.84	100.89

表14 T14 南壁・T15 南壁 水田1C

表14	Aライン－ 想定畦畔3	想定畦畔3－ 畦畔11	畦畔11－ 畦畔12	畦畔12－ T15西端
平均値(m)	100.75	100.79	100.69	100.76
最高値(m)	100.75	100.82	100.78	100.82

表15 T15 西壁, 北壁 水田1C

	T15西壁	T15西端－ 畦畔14	畦畔14－ 畦畔13	畦畔13－ T15西端
平均値(m)	100.75	100.72	100.72	100.65
最高値(m)	100.82	100.76	100.76	100.70

表16 T15 断ち割り1・2, 試掘坑1 水田1C

	断ち割り1	断ち割り2	試掘坑1
平均値(m)	100.78	100.69	100.80
最高値(m)	100.82	100.70	100.82